

日本障害理解学会 2011 年大会(平成 23 年 11 月 12 日)報告

1. 学会企画シンポジウム

これからの障害理解研究・実践の進め方
ー現場における障害理解教育研究の
進め方(講座)ー

企画者: 水野智美(筑波大学)
西館有沙(富山大学)
話題提供者: 西館有沙(富山大学)
松本和久(岐阜市立岐阜
特別支援学校)
水野智美(筑波大学)
向後礼子(近畿大学)
司会者: 石上智美(医療科学大学)

学校や企業など、さまざまな場における障害理解教育や障害理解指導、障害理解活動に関する研究が報告されるようになってきている。しかし、なかには障害理解の観点から見て不適切と言わざるを得ない実践の報告や研究手法に誤りのある研究が散見される。

そこで本シンポジウムでは、実践研究においてどのような考え方に立ち、どういった手法を用いて実施をし、効果を検証していけばよいのか、実践研究をするにあたってどのような配慮が求められるのかなどについて、障害理解教育研究の専門家が話題提供を行うこととした。これにより、教育現場における障害理解研究の進め方に関する議論を深めることを目的とした。

西館有沙は、実践研究の実例として、小学校の児童を対象に行った、視覚障害理解を目的とした授業を紹介し、どのような考えのもとに内容や教育方法が選定されたかを説明した。加えて、実践を積んだ上で感じている課題として、継続的な教育の実践とその効果検証が不足していること、教育効果を図

る測定法の開発が必要であることなどを挙げた。

松本和久氏からは、学校において障害理解研究を進める際に、実践者はどのような点に配慮すべきであるのかについて報告した。具体的には、障害のある子どもとない子どもの両者にとって有益な内容となることに留意して進めることが重要であり、どちらかに不利益の生じるような研究は避けるべきであることが示された。また、実践の効果を過大に、あるいは誤って解釈すると、子どもの認識をゆがめる実践が広まってしまうことになるので、実践の効果は慎重に考慮されなくてはならないことが強調された。

水野智美氏からは、障害理解教育の効果検証において用いる手法についての話題が提供された。たとえば、知識を図る手法として知識テストが、また、認識を図るものとしては盲人能力観尺度(徳田, 1990)などが示された。さらに、態度を測定する手法として、障害者に対する多次元的态度尺度(徳田, 1991; 生川, 1995 など)、文章完成法(徳田・桐原・高見, 1996)、ストーリー作成法(水野・徳田, 2002)などが挙げられた。一方、選定してはならない手法としては、Picture-Ranking 法、ソシオメトリ法、障害児・者に対して好意的か、非好意的かを問う一元的态度尺度が挙げられた。

向後礼子氏からは、現場研究で得たデータを統計処理する際の手続きや留意点が説明された。具体的には、パラメトリックとノンパラメトリックそれぞれのデータを分析する際に用いる手法と分析する際の留意点、対応のあるデータと対応のないデータそれぞれの扱い、因果関係と相関関係、外れ値の扱いなどが説明された。

(文責: 西館有沙)

2. ポスター発表

発達障害に関する小学生の認識 2

- 西館有沙（富山大学）
- 水野智美（筑波大学）
- 徳田克己（筑波大学）

本研究では、市民に対する発達障害理解教育の内容を検討する研究プロジェクトの一部として、小学生が発達障害児の行動特性をどうとらえ、いかにかわろうとするかを明らかにすることを目的とした質問紙調査を実施した。その結果、学年が上がるにつれて他者の行為や言動に寛容的になるわけではないことが確認された。また、小学校中学年以降では、他者の行為や言動が自分を含めた周りの人に迷惑をかけるものでない限り、自分には関係ないことであるととらえて反応しなくなる傾向が確認された。

発達障害児者とその家族のニーズ 2 ー教師・保育者に対するニーズー

- 吉田映理子（筑波大学大学院）
- 西館有沙（富山大学）
- 水野智美（筑波大学）
- 徳田克己（筑波大学）

本研究では、発達障害児者とその家族が作成したホームページやブログを通して、教師・保育者に対するニーズを把握することを目的とした。インターネット検索エンジンを用いて、教師・保育者に対してのニーズが記載されたホームページ及びブログを抽出し、カテゴリー分類を行った。結果から、発達障害児と家族は、教師・保育者に対して、家族との連携を前提としながら、発達障害児の個々の特性に合わせて具体的に対応できること、周囲の子どもに対する障害理解を促すこ

とのできる実践力を求めていることが確かめられた。

小学校全学年での聴覚障害を中心とした 障害理解授業の実践

- 福永純恵（新潟県柏崎市立比角小学校）
- 加藤哲則（上越教育大学）

児童の発達段階を考慮した聴覚障害理解授業について検討するために、小学校全学年を対象に授業実践を行った。授業の構成は、聴覚障害への気づき・知識化・情緒的理解をねらいとし、聴覚障害者の生活紹介、補聴器の視聴体験、絵本の読み聞かせを取り入れた。授業直後と授業後1か月の事後評価から、授業を受けた児童は聴覚障害に関する知識や聴覚障害者への対応の仕方の定着が認められた。障害理解授業の継続的な実施により、児童が得た知識を実際に行動できる段階まで高度化することが必要であると考えられた。

肢体不自由者の移動の困難性に対する肢体 不自由者と大学生の意識の差異

- 小川奈々（聖心女子大学大学院）
- 植田誠治（聖心女子大学）

本研究では、肢体不自由者と大学生の障害に対する意識の差異を明らかにすることを目的とし、両者に対して肢体不自由者の移動の困難性に対する質問紙調査を行った。その結果、大学生のほうが肢体不自由者より多くの困難に気が付くこと、困難な状況にいる時に周りの人に対して、肢体不自由者は放っておいてほしいと望むのに対し大学生は見守りを望むこと、肢体不自由者が困難な状況にいる時、大学生は見守りを意識することが明らか

になった。

幼稚園における障害理解指導の実践例1 ー導尿を必要としている子どもについてー

○大越和美（愛友幼稚園）
水野智美（筑波大学）
徳田克己（筑波大学）

幼児期から障害理解指導を行うことの必要性が指摘されている。保育時間内に導尿が必要な子どもについて、どのように保育者が周りの子ども達に理解指導を行ったかの実践例である。指導は、三つの点をポイントに行った。導尿の必要性（障害による特性の理解）、排泄を我慢することの危険と排泄に関して見られたり聞かれたりするとは誰もが恥ずかしいと思うこと（共通性）、A児は排泄には援助を必要としているが他の身辺自立に関しては努力してできるようになったこと（A児に対するプラスの評価）である。指導を行ったことで指導を受ける前にあった、周りの子ども達からの排泄に関する疑問やからかいは見られなくなった。

特別なニーズがある子どもの保育において 保育者が保健師に求める支援について

○稲田麻実(筑波大学大学院)
水野智美(筑波大学)
徳田克己(筑波大学)

本研究は、特別なニーズがある子どもを保育する際に保育者が保健師に求める支援ニーズを明らかにすることを目的とし、保育者と保健師の両者に質問紙調査を行った。保育者499名、保健師35名を分析の対象とした。結果、保育者は「虐待されている子どもへの対応」、「障害名を診断されている子どもの保育」について特に支援を求めている。しかし、

「障害名を診断されている子どもの保育」について保健師は支援の必要性をあまり感じておらず、両者に認識の相違があることが明らかになった。

特別なニーズのある子どもの研修に関する 保育所保健職員のニーズ ー経験年数、資格による研修ニーズの違いー

○西村実穂（東洋大学）
水野智美（筑波大学）
徳田克己（筑波大学）

特別なニーズのある子どもの保育に関する保健職員の研修ニーズを明らかにすることを本目的として保健職員に対する質問紙調査を行った。若手看護職、ベテラン看護職、若手保育者、ベテラン保育者の4群に分け、回答を比較したところ、いずれの群においても特別なニーズのある子どもの保護者への対応に関する研修ニーズが高かった。若手保育者は研修が必要であると強く感じている項目が他の群よりも多く、特に子どもへの具体的な対応方法に関する研修ニーズが高かった。

発達障害児への支援において 養護教諭が抱える困難と 発達障害に関する研修へのニーズ

○白石晴香（土浦市立斗利出小学校）
水野智美（筑波大学）
徳田克己（筑波大学）

本研究では小、中学校および高等学校に勤務する養護教諭を対象に質問紙調査を行い、発達障害児に対する個別の関わりの状況、発達障害に関する研修へのニーズを明らかにした。保健室での個別の関わりとして、「話し相手になる、悩みを聴く」を行っている者が多かった。研修のニーズとしては、「障害の特性

に応じた学校での対応を学びたい」というニーズが最も多く挙げられ、より現場の実践に近い内容が求められていた。

絵本『月のかがやく夜に』におけるがんの扱われ方—子どもにがんを伝える教材としての視点から—

○真家 年江（筑波大学大学院）
水野 智美（筑波大学大学院）
佐々木美樹（東葛辻仲病院）

本研究は、親のがんを子どもに適正に伝えるためのツールである絵本『月のかがやく夜に』を用い、その内容分析を行い、がん理解のための適切な教材づくりの基礎的資料を得ることを目的とした。内容分析の結果、本書は挿絵、言葉等を修正すれば、子どもにがんを伝える教材として活用できることがわかった。多くの子どもたちのがん理解を深めるには、適正な教材の用意と共にがんを伝える専門家の協力が必要であることが考えられた。

精神障害が登場する絵本の内容分析—専門家による精神障害理解の教材としての絵本の評価—

○仲本 美央（淑徳大学）
藤本 昌樹（静岡福祉大学）
若林ちひろ（清和大学短期大学部）
有馬聡子（まどか保育園）

本研究は、精神障害が登場する絵本が精神障害の理解指導において活用できるのかを明らかにすることを目的として、臨床心理士および精神保健福祉士、保育士、保育学研究者がその内容の適切性を評価し、検討した。その結果、読み手を子どもから対象とする絵本とするならば作成者が精神障害を理解するためだけの視点だけでなく、子どもが絵本を理

解していく過程や発達の程度に応じた作成をする配慮が必要であることが明らかとなった。

障害理解の視点からみた道徳副読本における障害の扱われ方の変化—2003年度版と2010年度版を比較して—

○水野智美（筑波大学）
徳田克己（筑波大学）

本研究は、2010年度に発行された道徳副読本における障害の扱われ方を分析し、2003年度版と比較して、どのように変化したのかを明らかにした。その結果、2010年度版では障害者に対する適切な支援方法が示されるようになったとともに、障害者の特性を示す教材が増加していた。しかし、依然として障害者やその家族の苦労や苦悩を強調した教材や偉業を成し遂げた人物を美談として扱う教材が多く扱われていることを確認した。

百貨店販売員が対応に困ると感じている顧客について一買い物支援の具体的な方法を考える資料として—

○徳田克己（筑波大学）
水野智美（筑波大学）
西館有沙（富山大学）

百貨店（計5店舗）に勤務する販売員958名に対して、3つの場面（発達障害のある人が百貨店の中でしばしば見せる特徴的な行動の3場面）への対応について質問紙調査をした結果を報告した。発達障害があると思われる顧客を接遇している販売員が多くいること、その際にそれぞれ接客の工夫をしているが、すべてが適切であると言えないこと、販売員が受け身の姿勢で接遇することは発達障害のある顧客をとまどわせることなどが確認された。